広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第39号　2011．3〉

# 多文化共生社会の視座に立つ小学校外国語活動の単元開発に関する研究

## ―テキストマイニングによる効果の分析―

林原　慎　川﨑　正盛　小早川善伸　安松　洋佳
中村　千絵　深澤　清治　平川　幸子

### １．はじめに

地球規模で急速に広がる国際化の中，日本もまたさまざまなレベルで激しい国際化の最中にある。地球規模で行われているモノの移動，国境を越えた人々の移動，インターネットに代表される情報の国際的な流通など挙げれば枚挙に暇がない。このような急激な変化の中で，外国語活動が担う役割は大きい。日頃から慣れ親しんでいる自分たちの言語や文化以外に，異なる言語や文化があって，それらが自分たちの文化と対等であるという態度，さらには言語や文化間には，優劣がないという態度を身につけることは国際社会で生きていくためには必要不可欠なことであると考える。また，積極的に「ことば」を用いて相手とコミュニケーションを取ろうとする態度も必要となる。しかしながら，今日，我々が直面している問題は，もっと身近で，もっと切実な問題となっている。外国人労働者や外国籍児童，帰国子女，国際結婚など多文化共生が現実に我々の生活の中にすでに浸透してきている。このような現実を直視した場合，小学校の外国語活動は，今までにも増して非常に重要な意味をもつようになる。小学校の外国語活動は，将来にわたって，子どもたちの外国語学習や異文化への態度，つまり多文化共生への態度を左右する大切な「出会いのプログラム」であると言える。よって，授業の中では常に児童の外国語に対する動機付けや興味を喚起する活動が行われなければならない。そのことが，「いろいろな文化をもつ人とかかわって行きたい」「いろいろな外国の人と話がしてみたい」「外国に行ってみたい」といった子どもの興味・関心にもつながって行くと考える。さらに，中学校外国語科への円滑な連携を考慮したときに，小学校外国語活動で培う「外国語への関心」や「異文化に対する寛容な理解」は重要性を増すであろう。新学習指導要領に示された「音声を中心とし」，「外国語に慣れ親しませ」ながら学習活動を行うことに加えて，「多文化共生社会」に生きるための資質の育成を掲げることが，長期的な視点から考えても有用であると考える。外国語活動を単なる活動のみで終わらせるのではなく，学習内容の中で大きな目標を掲げることが，結果的に外国語への知的な興味・関心へとつながり，外国語を学習する内発的な動機へとつながって行くと考える。

### ２．研究の目的・方法

本研究の目的は，①多文化共生社会の視座に立つ小学校外国語活動の単元開発を行うこと，②記述式のアンケートの分析により，実践した単元の効果を分析すること，の２つとする。新学習指導要領では，小学校高学年において「外国語活動」が設置され，平成22年度の完全実施にさきがけて，すでに多くの小学校で先行実施されている（広島県では100％の小学校が実施している）。本年度（平成21年度）の広島大学附属三原小学校（以下，本校）の外国語活動は，新学習指導要領に基づいて年間全35時間を設定した。本年度は，１つの単元を３学校時間から４学校時間で構成し，外国語活動の指導を行うようにカリキュラムを開発している。本校では，前節のような考察に基づき，子どもたちが現在及び将来にわたって生きていく社会の中で，必要な力を育成していくために，小学校外国語活動でめざす子どもの姿を「多文化共生社会に生きるための資質を備え，外国語に対する好奇心を抱く子ども」と設定した。本研究ではこのような背景を踏まえて多文化共生の視座に立つ小学校外国語活動の単元を開

Shin Hayashibara, Masamori Kawasaki, Yoshinobu Kobayakawa, Hiroyoshi Yasumatsu, Seiji Fukazawa, Yukiko Hirakawa, A research on the Units Development of Foreign Language Activities in Elementary School: Analysis of the Effectiveness by Text Mining

発，実施する。さらに単元の終了時にアンケートを実施し，「授業の感想」と「何のために外国語を学習しているのか」を無記名，自由記述で行う。回収したアンケートの回答をSPSS Text Analytics for Surveys 4.0によって分析し，単元の効果について論じることとする。

以下に，本単元の概要を述べる。

**（1）単元名**　ベースボール

**（2）対象児童**　小学校6年生　38名

**（3）本単元の目標**

○英語でのコミュニケーションを楽しむことができるようになる。

○英語の音声や表現に慣れ親しむ。

○外来語・和製英語と英語の言い方の違いやベースボールの中の多文化共生に気づく。

**（4）単元計画**

第1次　いろいろな外来語を知ろう……2時間

第2次　ジェスチャーで伝えよう……1時間

第3次　ベースボール用語を発音しよう……1時間

**（5）単元設定の理由**

野球はサッカーと並んで児童にとって身近な球技である。また，人気のあるスポーツでもあり，体育の授業で行うティーベースボールを楽しみにしている児童も少なくない。「プロ野球をテレビなどでよく観る」児童は15名おり，そのうち男子は13名，女子は2名であった。児童は野球の大まかなルールや初歩的な用語は理解していることから，興味を高める教材になり得ると考えた。さらに，野球は行われている国々で用語を工夫しながら普及・発展し，多くの人々に親しまれていることから，アメリカと日本での野球の言葉の違いを比較するだけでも，そのことを実感できると考えた。野球の用語のみでなく，ふだん使っている外来語や和製英語が実際の英語とは違うことを知ることで言葉の違いの面白さを感じることもできる。さらに，近年では日本人選手が国境を越えて活躍しており，多国籍の選手が一つになってプレーしていることを知ることで，多文化共生について知ることができると考えた。

**（6）学習の実際**

第1次では，『英語ノート1』（文部科学省）のLesson 6を活用しながら授業を進めた。ボール，グローブ，テレビ，バナナ，ギターなど外来語として定着している食べ物や日常の周りの物を日本語と英語の発音の違いを確認しながら，授業を行った。また，スパゲッティ，シュークリーム，キムチ，すしなど世界各国の有名な料理とその英語の発音について学んだ。さらに，『英語ノート』には載っていないが，生活の中で使っている和製英語についても取り上げ，英語との違いについて学んだ。例えば，サラリーマン，ハンドル，キーホルダー，パソコンなど児童が英語だと思っていた言葉が，実は日本で作られた和製英語であったことを伝えると，驚きながらも興味をもって学んで行った。続く第2次では，ジェスチャーで，学んだ外来語や和製英語を伝える活動を行った。3～4人でジェスチャーを考え，相手に伝えた後，「What's that?」「This is…」のコミュニケーションを取るような活動を取り入れた。第3次では，メジャーリーグのチーム数，在籍する選手の国の数などをクイズ形式で進めたり，「キャッチボール」「フォアボール」「ガッツポーズ」などの和製英語を学んだりした。児童のよく知っている日本人メジャーリーガーがチームメートと喜びを分かち合っている写真を意図的に提示し，国籍を超えた選手が同じ目標に向かって頑張っている姿から，多文化共生の未来を感じさせるようにした。最後は，国旗とベースボール用語を記したカードを一人ひとりに渡し，カードに書かれている情報から同じ国の人を探し，グループでジェスチャーをして，クイズにする活動を行った。ここでは「Where are you from?」「I'm from…」の文型を使ってコミュニケーションを行った。

なお，第1次から第3次までを通じて，授業の導入では，国旗クイズを行った。これは，児童の知っている色，形，地域などの英語を駆使して，児童同士が英語でヒントを出し，どこの国旗かを当てるクイズで，多文化共生の前提となる外国に対する知識や興味・関心を引き出すために開発したものである。この国旗クイズではメジャーリーグで活躍する選手の国を意図的に提示することで，選手が多国籍であることを印象付けた。また，単元を通じて全員の活動への意欲が高まるようにグループで協力が必要となる活動を行い，多文化共生のために必要な他者とかかわる力を養った。授業は，すべて担任とJTEのティームティーチングで行った。

## 3．成果と課題

### 3－1　授業の評価

回収したアンケートの中の「授業の感想」についての回答をMicrosoft Excelに入力し，そのデーターをIBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0に読み込み分析した。分析の手順は次のとおりである。まず，授業の全体的な評価をするために，キーワード抽出を行い，それぞれのキーワードをポジティブタイプ（良い）とネガティブタイプ（悪い）に分類した。結果は，表1のようになり，ポジティブタイプのキーワードが36，ネガティブタイプのキーワードが20であった。なお，「良い―良い」「悪い―悪い」などのキーワードは動詞，

表１　各タイプのキーワード抽出の出現頻度

| ポジティブタイプ | 36 | ネガティブタイプ | 20 |
|---|---|---|---|
| 良いー良い | 17 | 悪いー悪い | 14 |
| 良いー楽しい | 17 | 悪いー不満 | ６ |
| 良いー嬉しい | 1 | | |
| 良いー褒め・賞賛 | 1 | | |

形容詞，感性に関する語彙など予め登録されている抽出機能に従った結果である。ポジティブタイプの解答は，活動に対する楽しさや授業に対する満足度などが記述されており，キーワード抽出は妥当であった。

さらに，ネガティブタイプについてはその内容についての検討を行った。結果は表２のようになり，英語を覚えることの難しさについて言及している回答が７，英語の発音の難しさについて言及している回答が５，地理的知識の難しさについて言及している回答が１，授業に対する要望について言及している回答が５という結果であった。これらの回答には，発音の技術や知らない知識などにおいて難しい部分がある半面，楽しい部分や勉強になる部分もあると回答されていることから，キーワード抽出での分類ではネガティブタイプに所属しているが，全体的な内容では肯定的であると受け取れる。しかしながら，授業に対して「不満足・否定的な感想を述べている回答」が１つ見られた。記述内容を確認すると文章からは，確かに授業に対する批判が読み取れる。しかしながら，授業実施時においては，活動や参加していない児童や授業中に批判的な言動ばかり言う児童は見られなかったため，アンケート記入時の感情の状態が極端に良くなかった可能性もある。次に，授業の何が楽しくて何が難しかったのかを分析するために，キーワードを整理・修正し，類義語などを１つにした上で，出現頻度５回以上の各キーワードについてカテゴリを作成した。作成されたカテゴリの定義を再度吟味しながら最終的な見直しを手作業で行い，webグラフのネットワークレイアウトを使ってカテゴリ間の関係を見た。このような手続きで作成されたカテゴリは全部で９つとなり，「外国語（25)」,「楽しい（16)」,「活動（15)」,「勉強（15)」,「難しい（14)」,「発音（13)」,「分かる（11)」,「覚える（11)」,「世界（８)」であった。このうち，外国語活動の授業の楽しさと難しさを分析するために，「外国語」,「楽しい」,「難しい」の３つについてwebグラ

表２　ネガティブタイプのキーワード出現頻度の分析

| |
|---|
| **〇英語を覚える難しさについて言及している回答** |
| ・英語を覚えるところが**難しい**。　・覚えることが**難しい**　・英語を覚えることが**難しい**。楽しく思えた。<br>・昔より外国語が楽しくなった。時々覚えられないことがある。**難しい**外国語がある。<br>・英語を覚えたり、しゃべったりするのは**難しい**。でもこんな交流の仕方があるのかと思ったりすることもあるので、そういうところは勉強になる。　・覚えるのは、**大変**だけど、その後が楽しい。<br>・世界の事が知れたり、表現やジェスチャーを使って色々なことをするのが楽しい。初めて習う単語を覚えるのが**難しい**。いろいろな外国語を話せるようになって、外国に行ったとき、使えそうだと思う。 |
| **〇英語の発音の難しさについて言及している回答** |
| ・ＲとかＶとかの発音が、たまに忘れることがある。日本人はほとんど日本語で話すので英語を覚えるのがすごく**難しい**。　・英語が聞き取りにくい。意味が良く**分からない**ことがある。　・英語のクイズやゲームなどをするときが楽しい。英語の発音が**難しい**。外来語などが勉強になる。　・いつも良く分かるためにゲームなどをしてくれ楽しいし、発音などが**難しい**です。ちょっと簡単な英語をし、こつこつうまくなるところがいい。　・楽しいところは、数字とか使ってゲームをするとことで、**難しい**ところは、英語の発音や言い方です。勉強になるところは、外来語とか今まで知れなかったことを勉強するところです。 |
| **〇地理的知識の難しさについて言及している回答** |
| ・楽しいところは班とかグループ活動が多くて仲良くなれる。　・**難しい**ところは、国など地理。・勉強になる所は、いろんな英語や外来語との違いなどです。 |
| **〇授業に対する要望について言及している回答** |
| ・いろいろな言葉が分かって楽しいけど、発音だけ教えてもらうと**聞き間違い**があると思うので、黒板に英語で書いて、英語も教えてほしい。　・コンピュータを使って授業をしているのは良いと思います。でもプリントの場合、**分かりにくい**部分があるので**難しい**ところもあります。　・**難しい**ところはいっぱいあるけど、読んだりするのは、とても楽しいし、ゲームとかがあるから、しながら覚えられる。っていうのがすごいと思います。良く分かるし、発音も教えてくれて、勉強になる。　・分からなくても、先に進んでいって**分かりにくい**。　・クイズなどで分かりやすくしてある。進み方が**遅すぎる**と思う。 |
| **〇不満足・否定的な感想を述べている回答** |
| ・特に**意味はない**と思う。しかも簡単だし。**つまらない**。そんなに覚えて帰ってる人ほとんどいないと思う。 |

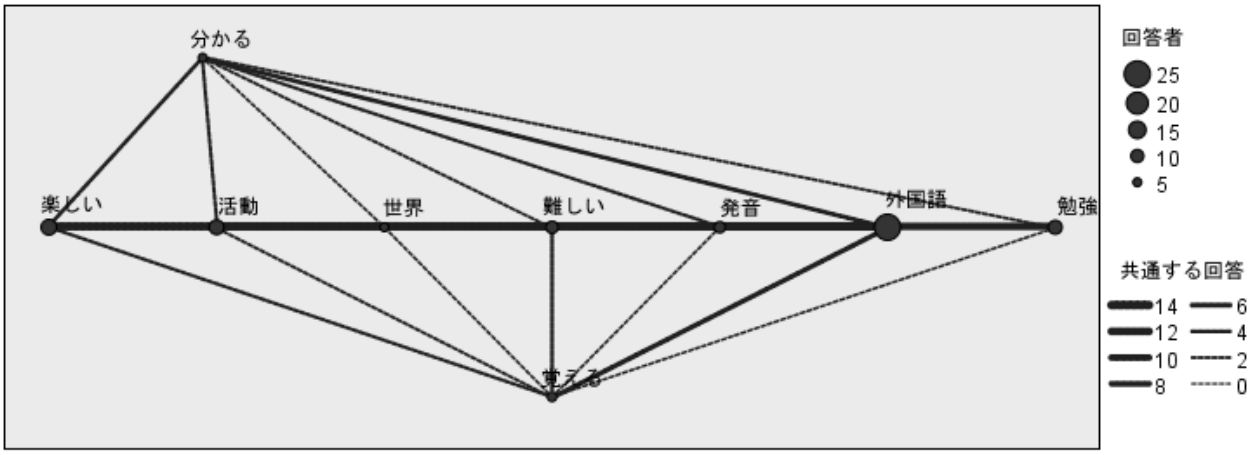


図１　「外国語」カテゴリと他のカテゴリとの関係

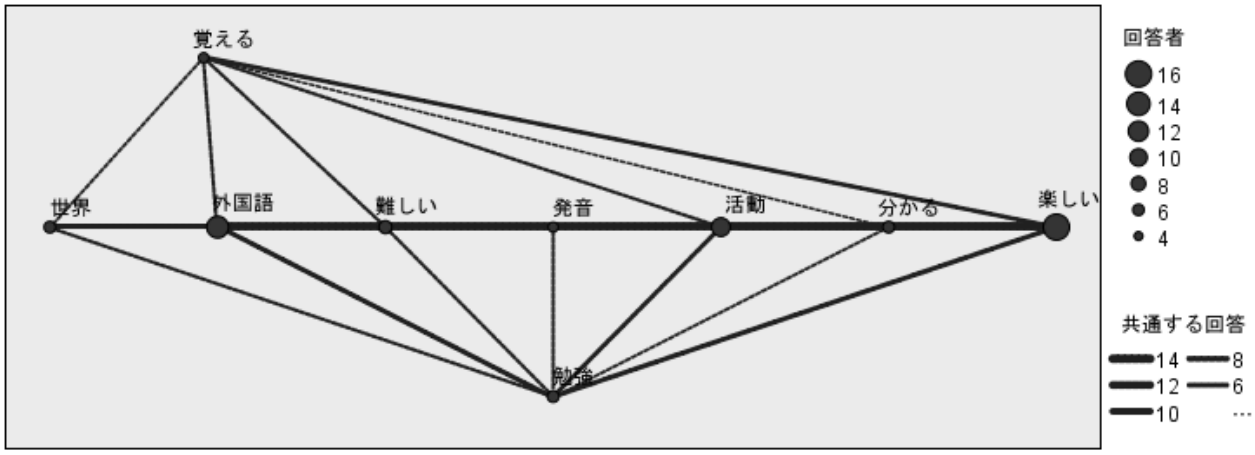


図２　「楽しい」カテゴリと他のカテゴリとの関係

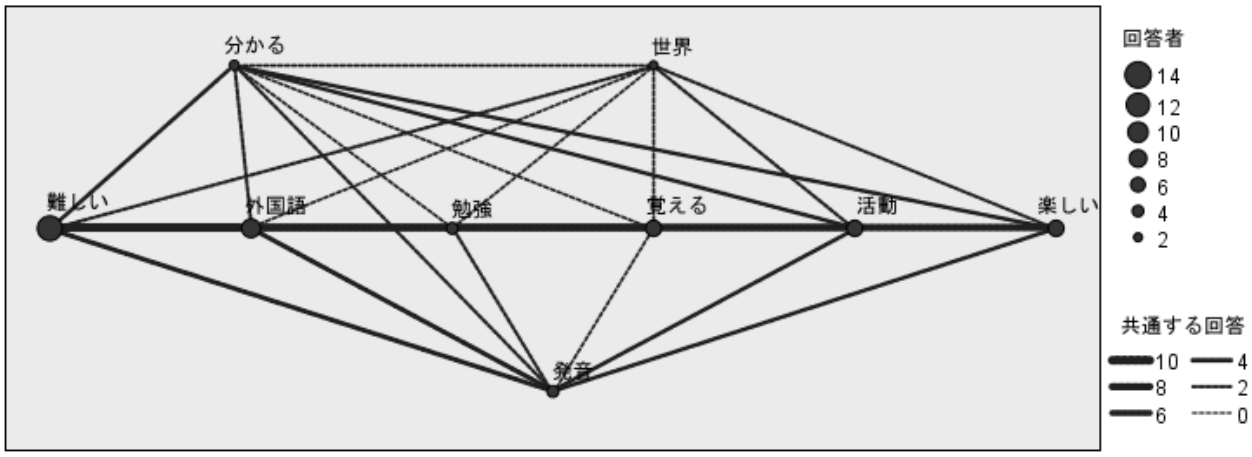


図３　「難しい」カテゴリと他のカテゴリとの関係

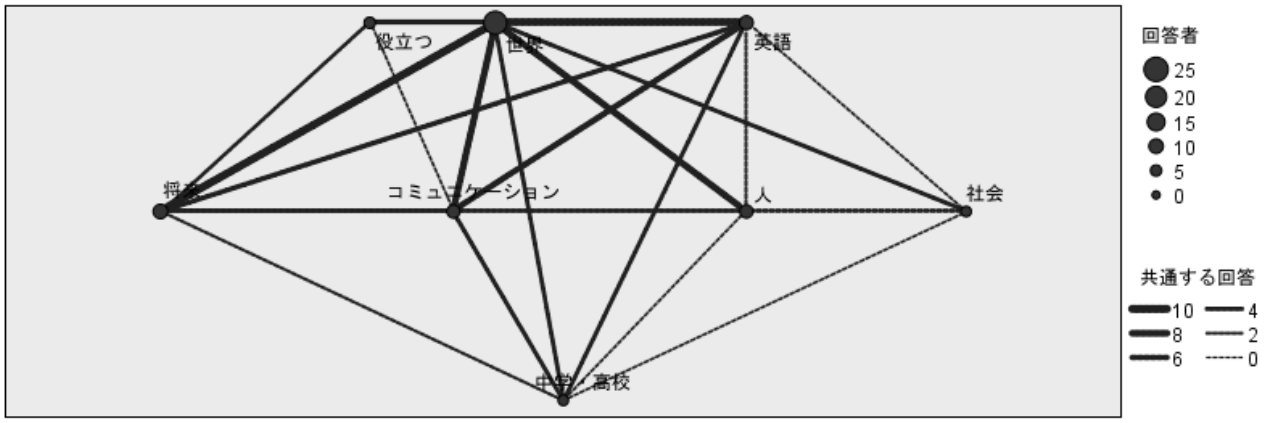


図 4　「世界」カテゴリと他のカテゴリとの関係

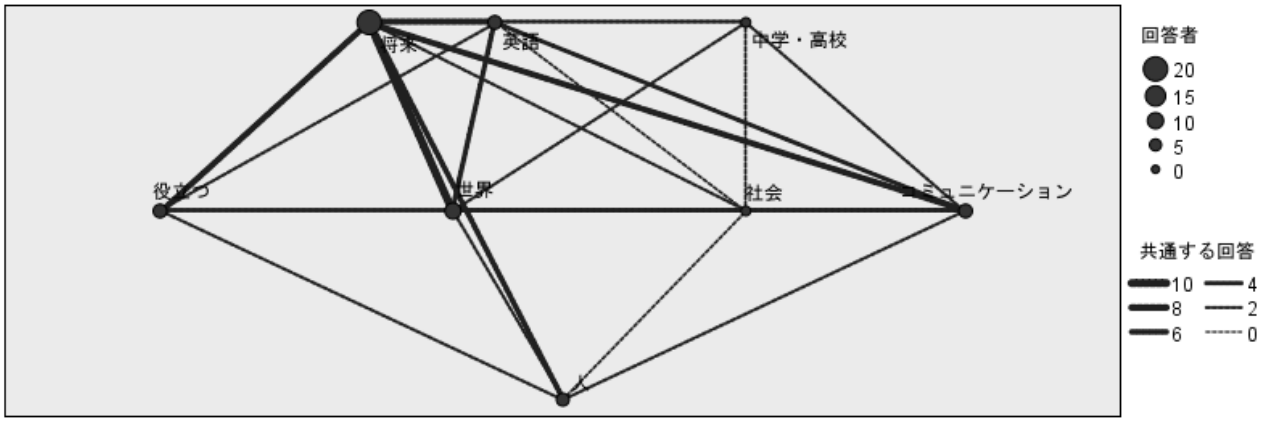


図 5　「将来」カテゴリと他のカテゴリとの関係

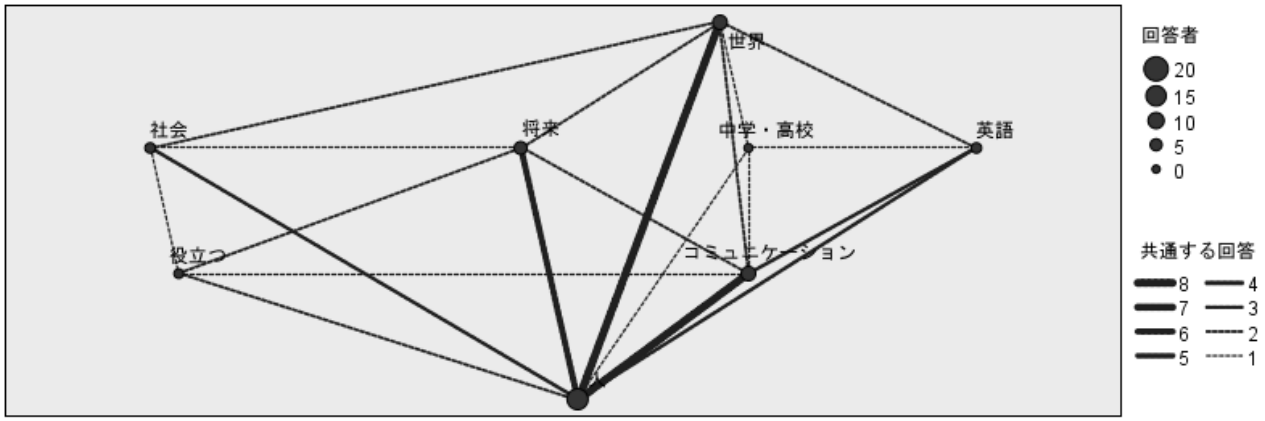


図 6　「人」カテゴリと他のカテゴリとの関係

フで表示し，結びつきの強いカテゴリを探索した（図１～３）。各カテゴリはそれを示す丸が大きいほど，回答者数は多い。また，カテゴリ間の位置や距離には特に意味はないが，線が太いほど共通回答が多く，結びつきが強いことを示している。「外国語」，「楽しい」，「難しい」のカテゴリと他のカテゴリの関係で共通して結びつきの強さを示しているのは，「活動」のカテゴリであった。また，「楽しい」カテゴリから結びつきが強いカテゴリは，「活動」，「外国語」，「分かる」，「難しい」，「発音」であり，逆に比較的結びつきが弱いカテゴリには「覚える」，「勉強」，「世界」があった。「難しい」カテゴリから結びつきの強いカテゴリには「外国語」，「勉強」，「覚える」，「活動」，「楽しい」であり，比較的結びつきが弱いカテゴリは「世界」，「分かる」であった。

以上のように児童の感想を分類したカテゴリの関係から，「外国語と活動を結び付けて捉えており，それらが楽しさと難しさを含んでいる」と感じていること，また，「楽しいけれど難しい」あるいは「難しいけれど楽しい」という関係があることが見えてくる。多文化共生に必要な資質を学ぶために，小学校の外国語活動が楽しく受容的な雰囲気で行われなければならないとするならば，授業の中の活動でこのような感想の傾向が示されたことは，一定の効果があったと考える。注目したいのは，「楽しいけれど難しい」あるいは「難しいけれど楽しい」という関係が見出されたことである。この経験は，違う文化をもつ人と共生していくときに，日本語の習得に困難な経験をしている外国の人の立場を理解するための第一歩となるのではなはないであろうか。しかしながら，授業についての感想で，わずか１名ではあったが不満を訴える児童がいたということは，大きな課題であった。多文化共生の視座に立つ外国語活動を志向するとき，児童にとっての「出会いのプログラム」に対してネガティブな感想をもたしてしまったことを反省しなければならない。

### ３－２　多文化共生の意識の分析

では，授業を行った単元全体で多文化共生の意識は育まれたのであろうか。「外国語は何のために学習するのか」という質問で得られた回答に対してキーワードを整理・修正し，類義語などを１つにした上で，出現頻度５回以上の各キーワードについてカテゴリを作成し，webグラフのネットワークレイアウトを使ってカテゴリ間の関係を見た。このような手続きで作成されたカテゴリは全部で９つとなり，「世界（23)」，「将来（20)」，「人（16)」，「コミュニケーション（15)」，「英語（13)」，「役立つ（９)」，「社会（５)」，「中学・高校（５)」であった。このうち，表出頻度が最も高かった，「世界」，「将来」，「人」の３つについてwebグラフで表示し，結びつきの強いカテゴリを探索した（図４～６）。「世界」のカテゴリと結びつきが強かったのは，「英語」，「将来」，「人」，「コミュニケーション」であった。結びつきが比較的弱かったものは「中学・高校」，「社会」「役立つ」であった。「将来」のカテゴリと結びつきが強かったのは，「世界」，「英語」，「コミュニケーション」であった。結びつきが比較的弱かったのは「社会」，「中学・高校」であった。「人」のカテゴリと結びつきが強かったのは，「世界」，「コミュニケーション」であった。結びつきが比較的弱かったのは，「中学・高校」，「役立つ」，「英語」であった。以上の分析から，児童の「外国語は何のために学習するのか」についての意識は，「世界」，「人」，「コミュニケーション」というキーワードで強く結びついており，「中学・高校」，「社会」，「役立つ」などのキーワードとの結びつきは比較的弱かった。このことから，児童は外国語活動を受験や成績，就職などのための学習と捉えていると言うよりも，「世界」，「人」，「コミュニケーション」を意識した多文化共生につながる学習と捉えている方が強いと言える。本研究において開発した小学校外国語活動の「ベースボール」の単元を通じて，児童は外来語や和製英語についての興味や関心を高めることができた。今後，総合的な学習の時間や国語などで英語以外の外来語を調べるなど，教科横断的なカリキュラム開発していけば，さらに「ことば」についての興味・関心を高める効果的な学びにしていくことができると考える。また，本研究では，多文化共生のために必要な資質の育成はある程度達成できたと考えられるが，年間35時間の限られた時間だけでは不充分であり，先に述べたように他教科・領域との連携，あるいは教育活動全体を通じた取り組みも必要となってくる。そのためには，教師の多文化共生の考え方に基づいた普段からの行動や態度，もしくは教師自身の多文化共生社会に対する在り方自体が益々問われるようになると考える。

### 引用（参考）文献


１）佐藤郡衛（2001)，国際理解教育―多文化共生社会の学校づくり，明石書店

２）松川禮子（2003)，小学校英語活動を創る，高凌書店

３）大和里美（2010)，キャリア教育における参加型授業の有効性に関する検討―テキストマイニングによる効果分析―，太成学院大学紀要第12巻 pp.139－149